すまいる Smile

美しいものを美しいと感じる心が芸術を生み出す

Vol.153

島木　英文さん
（岩国在住）

武蔵野美術大学建築学科を卒業後、建築事務所勤務を経てミニチュアアート作家となる。遠近法を用いた作品を得意とする。受賞作品多数。趣味は映画鑑賞。影響を受けた映画監督に今村昌平がいる。

空間に宿る光と影をも計算し尽くした設計図を基に、作り出される縮尺約20分の1の世界。その緻密で繊細な作品を作り上げているのはミニチュアアート作家の島木英文さんです。

下松市の建設会社の家庭に生まれた島木さんの日常にはいつも木を切り、釘を打つ音がありました。ものづくりに囲まれて育った島木さんは高校生の時、2年後に開かれる予定の大阪万博の建築の写真を雑誌で見て、建築への思いを熱くします。そして東京の美術大学で建築を学び、卒業後は都内の建築事務所に就職します。

家庭を持ち、仕事に励む日々でしたが、都会の生活から離れ、どこか別の場所に住みたいと考えるようになりました。新天地を求め、夫婦で8カ月半かけてスペインを巡る旅に出ます。「都市部の建築物ももちろん素晴らしいのですが、田舎の集落や町並みが強く心に残りました」

そして日本に戻ってきた島木さんが選んだ地がここ岩国です。「スペインの美しい川と町並みの風景がどこか岩国に重なった気がしたんです」と振り返ります。

岩国に移り住んだ島木さんに現在の活動の原点となる仕事が舞い込んだのは47歳の時。「商店街を盛り上げる企画で、雑貨屋の商品として販売する模型を作ることになりました。最初は小さな物でしたが、改めてものづくりの面白さに魅せられました」

そこからさまざまなミニチュア作品を作り、日本の原風景を描写した作品に力を入れました。中でも宇野千代生家をモチーフにした作品を制作した時のことを島木さんはこう語ります。「空間に奥行を持たせるため試行錯誤し、遠近法を取り入れました。これまでの経験が全てつながっていたんだと実感した出来事でしたね」

現在71歳の島木さんですが制作の手を止めることはありません。「頭の中に絵を描き、それを形にしていく瞬間が一番楽しいです。作品を見た人がそれぞれの空間を感じ、思いをはせてもらえたらうれしいです」

現在制作中の「用心棒」の構想について生き生きと語る島木さん

遠近法を用いて制作した「斜陽館」は島木さんの作品の真骨頂

細心の注意を払い、小さなパーツを組み立てる作業は大変な集中力を要する